

古代のハケ上

遺跡でわかる大昔の生活

「ハケ」は、広辞苑には丘陵の片岸とある。つまり「ハケ上」とは、崖地形の上の部分ということだろうか。今は東上線の敷設で東西に分断されているが、ハケ上東緑地公園、ハケ上西緑地公園あたりから鶴瀬駅に向かって坂を登りきったところまでか。

崖下には清き水が湧き川が流れている台地の上で、住みよい土地として人々の生活が脈々と受け継がれてきた場所であるようだ。ハケ上遺跡として発掘がされている。

水子貝塚資料館学芸員にお聞きすると、「旧石器時代（3万



草創期の土器と石鏃など
(ハケ上遺跡)



庚申塔



櫓の切り株
中央の白い丸は1円玉です！

5000〜1万6000年前の遺物も発見されている。縄文時代（1万5000〜2300年前）草創期の遺物は、たくさん発掘されていて、埼玉県内でも貴重な遺跡になる。縄文時代中期には、10軒余の集落跡も見られている」という。資料館に石器・土器の展示もされている。

ハケ上周辺はどんな所かなと散歩がてら昔からの道を歩いてみました。東上線の東側20メートルほどの所に大きな「櫓の木」の切り株がありました。年輪を数えたところ85〜86ほどありました。昭和の初期に芽生えた木です。

そのころは志木方面からきて、今の鶴馬関沢集会所の信号を斜め右方向に入った道が、川越方面への主要な「街道」だったようです。

その先には急な昇り坂があり、この道がハケ上の東側で、鶴馬や関沢との境界だったのではと思いました。

地元の方が農作業の手をやすめて話してくれました。昔はこの崖下の街道に「まんじゅうや」や「だんごや」があったようです。たぶんそこは旅人の休憩する場所だったのではないかと。

また、太平洋戦争中、お父さんの生家である街道脇の「まんじゅうや」へ疎開していたという、鶴瀬駅東口前の写真館の奥さんの話によりますと、この地域は、昭和20年4月の米軍機の爆撃では大変な被害を受けたそうです。

大正3年に東上線が開通し、昭和40年ごろには新しく県道が出来、それまで主要だった道路は市道になってしまいました。

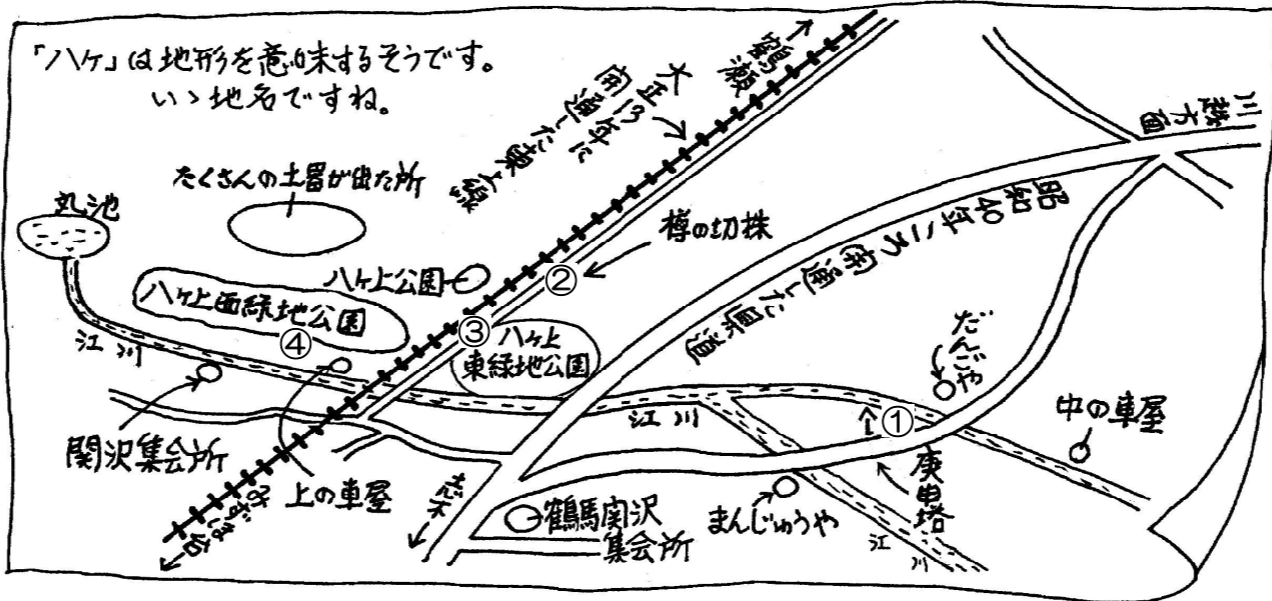
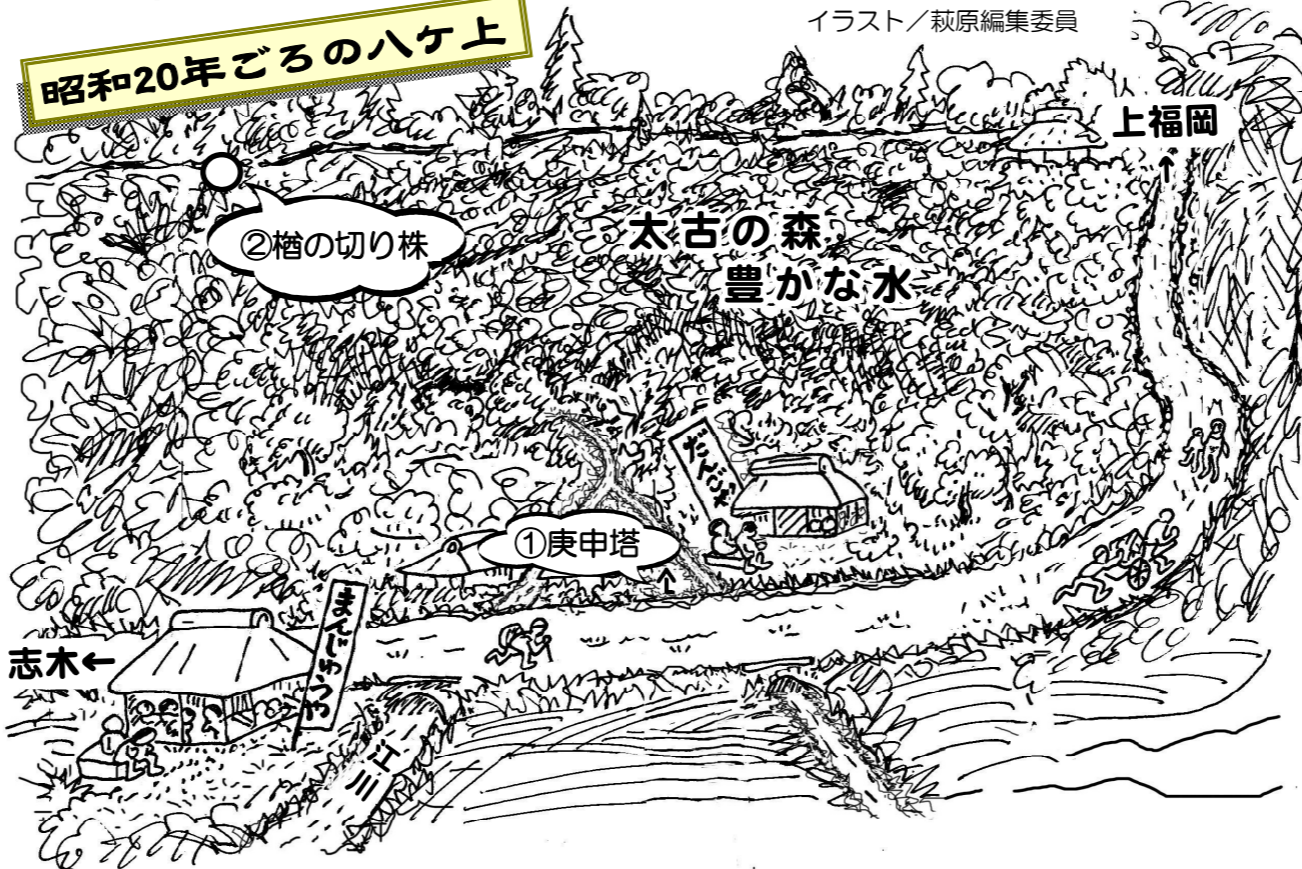
鉄道と道路で地域が分断され、ハケ上は鉄道の西側だけみたいになってしまいました。昔は崖下に市の看板があり、そこにはハケ上東緑地公園と表示があり確かに崖上と崖下が一体だったことがわかります。

昔は丸池から流れ出た清流の江川に、上の車屋（かみのくるまや）、中の車屋（なかのくるまや）、下の車屋（したのくるまや）と、水車を使った穀物加工の事業所が三つもありました。

あの櫓の木はずっと地域の変化を見てきたのですが、2〜3年前に伐採され、今ではかすれた年輪だけが変遷を物語っています。

昭和20年ごろのハケ上

イラスト/萩原編集委員



郷土をふり返る

西地区は、下図のように、丸池、権平、ハケ上、富士山、名志久保、下郷、本目、節沢などの小字割がされていたときがありました。

今は公園等の名称に使用され残っているくらいで、あまり耳にしなくなりました。

どうしてその名前がつけられたのか、どんな風景が広がっていたのかと、郷土のむかしに興味をわいて、2018年12月号で丸池を、2019年3月号で権平山を、今回第3段として、ハケ上を取り上げることにしました。



③ 線路の西側から見たハケ上東緑地公園



④ 現在のハケ上西側にはハケ上西緑地公園があります



出典：「鶴瀬西地区のあゆみ」より

ハケ上 こぼればなし